

## ジュール・ヴェルヌのパランプセスト<sup>1)</sup>

——『シャーンドル・マーチャーシュ』第5部第2章の場合——

### 三 枝 大 修

ジュール・ヴェルヌ (Jules Verne, 1828-1905) の 1885 年の長篇小説『シャーンドル・マーチャーシュ』(以下、『シャーンドル』と略記) の冒険の舞台は、アドリア海沿岸 (トリエステ, パジン, ロヴィニ, ラグーザ, コトル), 地中海の島々 (アンテキルタ島, マルタ島, シチリア島), ヨーロッパ (ジブラルタル, モナコ), 北アフリカ (セウタ, チュニス, カルタゴ, テトゥアン) と目まぐるしく移り変わってゆく。そして, 終盤の第5部第2章に至ると, 今度はトリポリタニア (現在のリビア北西部) が物語のメインステージとなるのだが, そこには以下のような一節が含まれている。

なお, オアシスの向こうは砂漠だが, アフリカのどこを探してみても, 砂漠やその流動砂丘がこれほど地中海のそばまで迫っている場所はない。クラフト男爵が述べていることだが, この巨大な砂の絨毯には「風が吹けば海面と同じくらい簡単に波が立つ」。すなわち, ときには微細な砂ほこりの霧まで立ちこめる, いわばリビアの大海なのである<sup>2)</sup>。

ヴェルヌ自身は明記していないが, ここに引かれているクラフト男爵の

- 
- 1) 本稿は, 2017年10月22日に慶應義塾大学で行われたシンポジウム「ジュール・ヴェルヌ再発見——作家と大衆作家」における筆者の口頭発表「ヴェルヌとロートレアモン」の内容の一部を発展させたものである。なお, 仏語文献の引用にはすべて拙訳を用いる。
  - 2) Jules Verne, *Mathias Sandorf*, J. Hetzel, coll. «Bibliothèque d'éducation et de récréation», t. 3, 1885, p. 183.

言葉の出典は、1860年に『世界一周』誌に掲載された紀行文「トリポリタニア散策」<sup>3)</sup>である。

そこで、試しに『シャーンドル』第5部第2章と「トリポリタニア散策」とを読み比べてみると、ある興味深い発見に行き着く。ヴェルヌが小説の中で紹介しているトリポリタニアの情報の大半は、じつはこのクラフト男爵の記事から仕入れてきたものなのである。

事実、あとで詳しく見ていくように、『シャーンドル』第5部第2章の中に織りこまれていたアラビア語やオスマン語の単語は、一般名詞であれ、地名等の固有名詞であれ、そのほぼすべてが「トリポリタニア散策」の中にも見つかる。また、ヴェルヌによるトリポリタニアの地誌学的記述は、クラフト男爵の文章が——ときにはやや粗雑にも見えるやり方で——パラフレーズされたものに過ぎないのだ。

《驚異の旅》シリーズの執筆のためにおびただしい数の参考文献を使用したことでも知られるヴェルヌだが、彼は具体的にはどのようなかたちで「トリポリタニア散策」のような他者の手になる言説を消化・吸収していたのだろうか。本稿では、クラフト男爵の紀行文と『シャーンドル』第5部第2章の比較・対照作業を通じてその点を明らかにしていきたい。

## 1. ヴェルヌが借りたもの

まずは概略を整理しておこう。クラフト男爵の紀行文からヴェルヌが仕入れたのは、主にトリポリタニアの地誌学的情報である。そして、その大半は、『シャーンドル』のメインプロットの構築に直接的に関与するわけではなく、物語の背景をリアルに描くためにのみ使用されている<sup>4)</sup>。つま

---

3) Baron de Krafft, «Promenades dans la Tripolitaine» [1860], *Le Tour du monde*, L. Hachette, 1<sup>er</sup> semestre 1861, p. 66-80.

4) ただし——本稿では詳しくは取り上げないが——「トリポリタニア散策」から汲みあげられた要素がヴェルヌの想像力による加工を経て、『シャーンドル』第5部第2章のメインプロットの一部にまで昇華されている例もある。

り、ヴェルヌは自分では訪れたことのない異国の地理や風俗をできるだけ精緻に描くためにクラフト男爵の記述を利用し<sup>5)</sup>、それによって自らの小説世界により強固なりアリティを付与しているのである。

では、『シャンドル』の作者が「トリポリタニア散策」の中に見出し、自作の中に取りこんだ要素とは、具体的には何であるのか。

ヴェルヌが借用した事項は相当な数にのぼるので、その内容も必然的に多岐にわたるが、ひとまず形式的に分類すれば、それらは大きく二つに分けることができる。

一つは、トリポリタニアで用いられているアラビア語やオスマン語の単語である。「トリポリタニア散策」の中に、クラフト男爵は——(フランス語にとっての)外国語であるということをイタリックで明示しながら——現地の言葉をいくつも埋めこんでいるのだが、ヴェルヌはその一部を借用しているのだ。そこには、例えば「スーグ・エッテラーテ平原」<sup>6)</sup>、「メンシーエのオアシス」といったトリポリ近郊の地名、「ガダーメス」、「ソクナ」などの街の名前、「ベン＝ウリード族」、「アワーキル族」といった北アフリカの部族名、さらには「ギブリ」(南風)、「ムサーフィル」(旅人)、

---

すなわち、クラフト男爵がバドウィン(砂漠に暮らす遊牧民)の老人から聞いたものとして紹介している鶴とコウノトリの逸話である。ヴェルヌはこの逸話から鶴の存在を消去し、物語に登場する鳥をコウノトリに一本化したうえで、それがアフリカに広く流布している「伝説」であるという文脈をでっちあげる。そして、その伝説の一部を再現する「コウノトリの祭り」がトリポリ郊外のスーグ・エッテラーテ平原で開催されようとしている、というフィクションを自作に導入するのである。「コウノトリの祭り」は『シャンドル』第5部第2章のみに描かれる局所的な出来事にすぎないが、紛れもなくこの小説のクライマックスの一つを構成しており、ヴェルヌがクラフト男爵の地誌学的言説を独自に消化・吸収したうえで自作に編みこんだ例として興味深い。参照したテキストを単に切り貼りして再利用するだけではない、

- 5) ヴェルヌは1878年と1884年に北アフリカ(タンジェ、テトウアン、オラン、アルジェ、アンナーバ、チュニスなど)を旅しているが、トリポリタニアまでは足を延ばしていない。
- 6) 「スーグ・エッテラーテ」は「火曜市」の意。なお、「スーグ」はアラビア語の単語「スーク」(市場)の北アフリカ方言の音である。

「レアヤー」(庶民)、「ザプティーエ」(憲兵隊)、「シヤーレット」(属州)、「スキーフア」(玄關ホール)、「アルーサ」(花嫁)など、ヨーロッパの読者にとってはエキゾチックな響きをもつ名詞の数々が含まれる。ヴェルヌは『シャーンドル』第5部第2章の舞台をトリポリに設定し、そこに——借り物だが——多くの現地語をちりばめることで、作品中の北アフリカの描写に生彩を与えているのである。

もう一つは、個別の単語ではなく、一定量の語句からなる情報——それを本稿では言述と呼ぶことにしよう——だ。それは、ヴェルヌの小説の中では例えばトリポリタニアの地理の説明<sup>7)</sup>、動物相の紹介<sup>8)</sup>、現地の人々の衣・食・住の描写<sup>9)</sup>となつて活かされている。のちほど検証するように、これらはいずれもクラフト男爵の記述に基づいて書かれており、そのいくつかはほとんど「トリポリタニア散策」に読まれる言葉の引き写しであると言っていい。ヴェルヌは単語のレベルでも、もう少し大きな言述のレベルでも、クラフト男爵の紀行文から多くのパーツを借り、それらを縫い合わせることで『シャーンドル』第5部第2章の物語の背景を織り上げているのである。

- 
- 7) Ex. 「チュニス属州とエジプトとサハラ砂漠に囲まれたトリポリタニアの国土は、フランスに匹敵する広さを持ち、地中海の沿岸300キロにわたって広がっている」(Verne, *op. cit.*, p. 183)。なお、ヴェルヌのこの記述は、クラフト男爵の以下の二つの文章を基にしている。「トリポリ属州とも呼ばれるトリポリタニアは […] 北は地中海、東はエジプト、西はチュニス属州、南はサハラ砂漠と接している」(Krafft, *op. cit.*, p. 66)。「トルコのパーシャが統治するこの領土の広さは、ほぼフランスの国土に匹敵する」(*ibid.*, p. 70)。
- 8) Ex. 「[オアシスには] レイヨウ、ガゼル、フェネック、フラミンゴもいる」(Verne, *op. cit.*, p. 183)。なお、「トリポリタニア散策」にも以下のような記述があり、その直後にはフラミンゴへの言及も見られる。「内陸部にいる大型の動物は決して海岸には近づかない。だから、見つかるのはせいぜいレイヨウ、ガゼル、フェネックといったところだ」(Krafft, *op. cit.*, p. 78)。
- 9) トリポリタニアの衣(フーリー)・食(バジーナ、ラクビ、ナツメヤシ)の描写については後述。また、トリポリの住居について、ヴェルヌは「建築資材の質が悪くてすぐに潰れてしまう家々」(Verne, *op. cit.*, p. 182)などと書いているが、この記述もやはりクラフト男爵の紀行文を情報源としている(cf. Krafft, *op. cit.*, p. 69)。

以下、本稿の第二章では単語が借用されている事例を、第三章と第四章では言述が借用されている事例を、それぞれ眺めていくことにしよう。

## 2. 単語の移植

ここでは、クラフト男爵の紀行文からヴェルヌの小説へと単語が移植されている事例について見ていく。検証作業は、(i) 固有名詞（地名）、(ii) 固有名詞（部族名）、(iii) 一般名詞、の三つのケースに分けて行う。

まずは、地名である。地中海全域を冒険の舞台とする『シャンドル』にはじつに多くの地名が登場するが、逐一確認してみると、じつはヴェルヌの用いているスペリングには——アラビア語圏のものはもちろんのこと、イタリア語圏のものですら——ずいぶんと誤記が多いことに気がつく。その数たるや、この小説家は固有名詞を転記しそこなっているのではなく、ひょっとしたらわざとその綴りを歪めているのではないか、すなわち、そんなふうにして地名のスペリングを変えることで、現実の地球とは異なる世界を創り出し、物語のフィクション性を高めようとしているのではないか、という疑念がきざしてくるほどである。

このような疑念を解消するためにも、ここからは「トリポリタニア散策」と『シャンドル・マーチャーシュ』の単行本（いわゆる「十八折判」）のほか、この小説の草稿と新聞連載版も分析対象として随時参照することにした。まずは、この四つの文献の書誌情報を以下に整理しておこう<sup>10)</sup>。

- (1) Baron de Krafft, «Promenades dans la Tripolitaine» [1860], *Le Tour du monde*, L. Hachette, 1<sup>er</sup> semestre 1861, p. 66-80. (クラフト男爵「トリポリタニア散策」。略号 KR)

---

10) 書誌情報に続く丸括弧の中に、各文献の概要を日本語で記しておく。また、本稿においてこれらの文献を参照する際には、付記してある略号を随時使用し、必要な場合にはその直後に参照箇所のパージ番号を記す。

- (2) BMN, MJV B147. (ヴェルヌ『シャーンドル・マーチャーシュ』の草稿。略号 VM)<sup>11)</sup>
- (3) Jules Verne, «Mathias Sandorf», in *Le Temps*, du 16 juin au 20 septembre 1885. (ヴェルヌ『シャーンドル・マーチャーシュ』の新聞連載版 [『ル・タン』紙]。略号 VT)<sup>12)</sup>
- (4) Jules Verne, *Mathias Sandorf*, J. Hetzel, coll. «Bibliothèque d'éducation et de récréation», 1885, 3 tomes. in-18. (ヴェルヌ『シャーンドル・マーチャーシュ』の単行本 [エツツェル書店の十八折判]。略号 VH [ただし、本稿で参照するのは第3巻のみ])<sup>13)</sup>

以上四種類のテキストを比較した結果、『シャーンドル』第5部第2章に登場する九つの地名のアルファベット表記の異同をまとめると、表1のようになる。

この表からわかるのは、『シャーンドル』の地名の転記はおおむね精確だということである。クラフト男爵の表記とのあいだに、たしかにいくつかの語については微細な異同があり、「Ghadâmès」のアクサン・シルコンフレックスが落ちていたり、「Soung-ettelâtè」の一つ目の「e」が小文字ではなく大文字になっていたりはするが、ヴェルヌは「トリポリタニア散策」の中のスペリングをおおむね忠実になぞっていると言っていだろう。ここには、あえて固有名詞を変形して架空の地名を作り出そうとする意志などは微塵も観察されない。

- 
- 11) Cf. 『シャーンドル』の草稿 (全3巻) はナント市立図書館のウェブサイト (<https://bm.nantes.fr/home.html>) で閲覧することができる (要登録)。紙葉の右上に手書きでページ番号が付されており、第1巻は110ページ、第2巻は154ページ、第3巻は126ページからなる。本稿の主な分析対象となる第5部第2章は、草稿第3巻の84-96ページに該当する。
  - 12) Cf. 『シャーンドル』第5部第2章は、1885年9月12、13、16日発行の『ル・タン』紙に掲載された。
  - 13) Cf. 『シャーンドル』第5部第2章を含む単行本第3巻は、1885年10月26日に刊行された。

表1 ヴェルヌが「トリポリタニア散策」から借用したと思しき固有名詞（地名）<sup>14)</sup>

	KR	VM	VT	VH	読み
1	Fezzan (66)	Fezzan	Fezzan	Fezzan (194)	フェッザーン
2	Morzouq (66)	Morzouq	Morzouq	Morzouq (195)	モルズーク
③	Ghadâmès (66)	Ghadamès	Ghadamès	Ghadamès (181)	ガダーメス
4	Bab-el-bahr (69)	Bab-el-bahr	Bab-el-bahr	Bab-el-bahr (191)	バーブ・ル＝バハル
⑤	Menchiè (70)	Menchiè (?)	Menchié	Menchié (183)	メンシーエ
⑥	Soung-ettelâtè (71)	Soung-Ettelâtè	Soung-Ettelâtè	Soung-Ettelâtè (179)	スーグ・エッテラーテ
7	Sokna (71)	Sokna	Sokna	Sokna (181)	ソクナ
8	Hammada (78)	Hammada	Hammada	Hammada (194)	ハンマダ
9	Mezda (78)	Mezda	Mezda	Mezda (195)	メズダ

表2 ヴェルヌが「トリポリタニア散策」から借用したと思しき固有名詞（部族名）<sup>15)</sup>

	KR	VM	VT	VH	読み
①	Benoulid (77)	Benoulid(s)	Benouliè(s)	Benouliè(s) (181)	ベン＝ウリード(族)
②	Awakir (77)	Awakir(s)	Awâguir(s)	Awâguir(s) (181)	アワークイル(族)
③	Bou-chébr (78)	Bou-Chébr(s)	Bou-lhebr(s)	Bou-lhebr(s) (194)	ブー＝シェブル(族)

だが、同じ固有名詞であっても、アフリカの部族の名前についてはやや事情が異なるようだ(表2)。

『シャンドル』の十八折判(VH)だけを、あるいは新聞連載版(VT)だけを見るならば、ヴェルヌは三つの部族名すべてについてクラフト男爵の

- 14) 「トリポリタニア散策」(略号 KR)と『シャンドル』十八折判(略号 VH)の列においては、それぞれの名詞の初出のページ番号を丸括弧に入れて示す。また、KRの列とVHの列でアルファベット表記が異なる語については、表の左欄の通し番号を丸で囲んで強調する(後続の表2、表3においても同様)。なお、「Menchiè」の語はヴェルヌの自筆原稿(略号 VM)に何度か登場するが、語末の「e」に付されたアクセント記号がアクサン・テーギュなのか、アクサン・グラーヴなのかは判別しがたい(そのため、表1では当該箇所にくエスチョンマークを付しておく)。
- 15) クラフト男爵と異なり、ヴェルヌは部族名等の現地語を可算名詞として扱い、その複数形には必ず「s」を付けている。本稿の表2、表3では名詞の複数形を表す「s」は丸括弧に入れて示す。

用いたもの (KR) とは異なるスペリングで書いているわけだから、この小説家が——よほど不注意だったのでなければ——意図的にそのような特殊な綴りを選びとった、という可能性も出てくる。だが、草稿 (VM) を確認してみると、どうやらこの異同は別のところに由来しているようなのである。というのも、スペリングの変化が起こっているのは、クラフト男爵のテキスト (KR) とヴェルヌの草稿 (VM) のあいだではなく、ヴェルヌの草稿 (VM) とその活字版 (VT, VH) のあいだであるように見受けられるからだ。つまり、これらの部族名のアルファベット表記を変更したのはヴェルヌではなく、ヴェルヌの——決して読みやすいとはいえない——自筆原稿を読みまちがえた植字工ではないかと思われるのである。

実際、『シャンドル』の草稿の中の「Benouliids」の「d」は読みようによっては「è」に見えないこともないし、ヴェルヌの書く「Awakirs」の「k」も低い位置でつぶれていて「k」よりはむしろ「u」に見える（ただし、「g」に相当する文字は草稿には見当たらないので、活字版 (VT, VH) の表記「Awâguirs」は不可解としか言いようがない）。さらに、「Bou-Chébrs」についても、ヴェルヌはクラフト男爵が小文字にしている「c」をおそらくは大文字で縦に長く書いており、それを植字工が小文字の「l」と見まちがえたのだろうという推測が成り立つ。「Benouliès」, 「Awâguirs」, 「Bou-lhebrs」という、それぞれクラフト男爵のものとは明確に異なる綴りは、したがって、ヴェルヌではなく、ヴェルヌの悪筆を正しく処理しきれなかった植字工のミスによって現れ出たものなのではないかと思われるのである。

この推測については、固有名詞のみならず一般名詞についても同じ対照作業を行ってみれば確信が得られる (表3)。

ここに挙げた十二個の単語の内、クラフト男爵の紀行文 (KR) と『シャンドル』の十八折判 (VH) のあいだでスペリングが異なるのは、「シャレート」, 「ラクビ」, 「ミスカール」, 「アルーサ」の四つである (厳密に言



表3 ヴェルヌが「トリポリタニア散策」から借用したと思しき一般名詞<sup>16)</sup>

	KR	VM	VT	VH	読み	意味・指示対象
①	cyalet (66)	cyalet	欠落	cyâlet (181)	シヤレト	属州
②	mouçafir (66)	Mouçafir(s)	Mouçafir(s)	Mouçafir(s) (181)	ムサーフィル	旅人
3	zaptiè (68)	zaptiè(s)	zaptiè(s)	zaptiè(s) (181)	ザプティエ	憲兵隊
4	râaya (70)	râaya(s)	râaya(s)	râaya(s) (181)	レアヤー	庶民
5	bazîna (71)	bazîna	bazîna	bazîna (197)	バジーナ	大麦粉の粥
⑥	laqby (71)	laqby	lagby	lagby (197)	ラクビ	酒の一種
7	skifa (75)	skifa	skifa	skifa (188)	スキーファ	玄関ホール
8	gibly (75)	gibly	gibly	gibly (179)	ギブリ	南風
9	mahboub (76)	mahboub(s)	mahboub(s)	mahboub(s) (197)	マフブーブ	銅貨
⑩	mitcal (76)	mictal	mictal	mictal (197)	ミスカール	重さの単位
11	haouly (76)	haouly	haouly	haouly (180)	フーリー	衣服の一種
⑫	aroucè (79)	aroucè	arrouée	arrouée (210)	アルーサ	花嫁

えば、「ムサーフィル」も頭文字の大小だけは異なる)。だが、ヴェルヌ本人が誤記したと思われるのは、主に貴金属の重さを量るときに用いられる重量の単位「ミスカール」のアルファベット表記のみだ。「acte」(行為)、「victoire」(勝利)、「octobre」(十月)など、フランス語に「ct」を含む単語は多いが、「tc」はほとんど見られない。そのためだろうか、ヴェルヌは「トリポリタニア散策」の中に出てくる「mitcal」を書き写すにあたって、これを「mictal」と誤記してしまっているのである。

だが、十八折判からさかのぼって『シャンドル』の草稿(VM)を見てみると、「ミスカール」以外の語については——なじみのない外国語であるにもかかわらず——転記がごく正確に行われていることがわかる。「シ

16) 12番目の単語「アルーサ」だけは、『シャンドル』第5部第2章ではなく第3章に登場する。クラフト男爵もヴェルヌもこの語は「婚約者」を意味すると書いているが、実際にはアラビア語で「花嫁」を指す。なお、表1~3に登場するアラビア語やオスマン語の多くについて、発音や意味を鹿児島大学の鶴戸聡氏にご教示いただいた。貴重なお力添えに心より感謝申し上げます。

ヤーレト」, 「ラクビ」, 「アルーサ」の三語についても, 自筆原稿を確認してみれば, 誤記しているのはあくまでも植字工であってヴェルヌではない——可能性が高い——ことがわかるのである。実際, 「ラクビ」について, ヴェルヌが「laqby」と正しく綴っていることは草稿を見れば明らかなので, 類似する「q」と「g」とを取りちがえたのは植字工だろうということが容易に推測できる。「アルーサ」は, 草稿 (VM) から新聞連載版 (VT) へと移行するあいだに六文字 (aroucè) から七文字 (arrouée) へと文字数まで増えていて不可思議な部分はあるが, 草稿におけるヴェルヌの綴りがクラフト男爵のものにピタリと一致することはまちがいない。一方, 「シャーレト」については, なぜか1885年9月12日発行の『ル・タン』紙に掲載されたテキストでは, この語を含む一節(「de ce cyâlet africain」)がまるごと欠落しているのだが, ともあれ草稿段階でヴェルヌがクラフト男爵のスペリングを忠実になぞっていたことは揺るぎない事実だ。

つまり, ここまで三つの表を用いて『シャーンドル』第5部第2章(「アルーサ」のみは第3章)に出てくる外国語のスペリングを検討してきたわけだが, 一般名詞にせよ, 固有名詞にせよ, ヴェルヌは非常に高い精度でクラフト男爵の用いた綴りを引き写しているのである。

### 3. 言述の移植

では, ここからは単語のレベルではなく, 言述のレベルでの書き換えの事例を見ていこう。

まず指摘できるのは, ヴェルヌが単語のみならず, 語句のレベルでもきわめて多くの表現をクラフト男爵から借りてきているということである。以下の例をご覧いただきたい。クラフト男爵の筆になるトリポリタニアの食文化の記述(KR)と, それをほぼ丸写しにしたと思しきヴェルヌによる民衆の食事シーンの描写(VH)である。

KR：庶民の食事は、油で調味された大麦粉の粥の一種、バジーナだ<sup>17)</sup>。

↓

VH：しがない連中の食事は、油で和えた大麦粉の粥の一種、単なる「バジーナ」だ<sup>18)</sup>。

「大麦粉の粥の一種」であるという「バジーナ」を説明するにあたって、見てのとおり、ヴェルヌは「油で調味された」(assaisonnée d'huile) というクラフト男爵の表現を「油で和えた」(à l'huile) へとわずかに変更し、さらにこの料理に「単なる」(simple) という形容詞を付け加えている。また、「庶民」(les gens du commun) を「しがない連中」(la multitude des pauvres diables) へと、大きく意味を変えることなく言い換えてもいる。だが、全体的に見れば両者の構文の一致は包み隠しようもないし、「大麦粉の粥の一種」(sorte de bouillie de farine d'orge) という七語からなるかたまりまで、ヴェルヌは「トリポリタニア散策」からまるごと拝借している。つまり、『シャーンドル』の作者は参考文献から情報を抽出し、それを自分なりに再構成しているというよりは、クラフト男爵の用いた表現そのものを移植しているのである。両者のテキストの共通部分の大きさに鑑みれば、この操作は現代の言葉でいうところの「コピペ」や「パクリ」に等しいと断じられても仕方のないところだろう。

とはいえ、ヴェルヌのテキストには、クラフト男爵の文章からの差異化を図ろうとする意思も明瞭に見てとれる。たしかに「トリポリタニア散策」の文章を、しばしばその構文にいたるまで踏襲することは多いものの、じつは一文全体をそのまま移植したケースはただ一つとしてなく、先ほどの「バジーナ」の例でもそうだが、ヴェルヌは類義語や類義表現を多用し

---

17) 原文：«la *bazîna*, sorte de bouillie de farine d'orge assaisonnée d'huile, pour les gens du commun.» (KR, p. 71.) イタリックによる強調は原文（以下同様）。

18) 原文：«une simple «*bazîna*», sorte de bouillie de farine d'orge à l'huile, pour la multitude des pauvres diables» (VH, p. 197.)

てかなり入念に書き換えているのである。『シャールドル』の作者がクラフト男爵の文章を自作に取りこむ際の、これが基本パターンであると言っていい。

KR：コウノトリは […] その名が硬貨に刻まれているような国には決して住みつかない<sup>19)</sup>。

↓

VH：彼ら [=コウノトリ] は、その名が銀貨に彫りこまれているようなところには決して住みつかない<sup>20)</sup>。

この例では、関係代名詞「dont」で二つの節をつなぐという構文はそのままに、「国」(pays)が「ところ」(contrée)へ、「硬貨」(pièce de monnaie)が「銀貨」(pièce d'argent)へと、名詞がそれぞれ類義のものに置き換えられている。訳文ではやや強引に訳し分けたが、関係詞節の中で用いられている動詞「se trouver」と「figurer」も、この場合にはほぼ同義（「記載されている」の意）で使えるものである。つまり、ヴェルヌは可能なかぎりの語の置換を行うことで、自らの文章が完全な引用ないしは剽窃と化してしまうことを慎重に避けているのである。

この差異化の作業が意図的なものであることが、草稿の中に確認できる例もある。

KR：預言者はその話を聞いて激怒し、お気に入りの鳥であるヤツガシラを呼び寄せて、地上にいる鶴をすべて呼んでこいと命令した<sup>21)</sup>。

---

19) 原文：«la cigogne [...] n'habite jamais les pays dont le nom se trouve sur une pièce de monnaie» (KR, p. 78.)

20) 原文：«ils [les cigognes] n'habitent jamais une contrée dont le nom figure sur une pièce d'argent» (VH, p. 195.)



VM：すると、預言者の方でもすぐにお気に入りの 鳥 使者 伝令係であるヤツガシラを呼びよせて、地球上のコウノトリをすべて呼んでこいと命じた<sup>22)</sup>。



VH：すると、預言者の方でもすぐにお気に入りの伝令係であるヤツガシラを呼びよせて、アフリカの空の高みに地球上のコウノトリをすべて連れてゆけと命じた<sup>23)</sup>。

ヴェルヌは草稿 (VM) に、まずは「お気に入りの鳥」(son oiseau favori) というクラフト男爵の表現をそのまま書きつけているが、その後、「鳥」(oiseau) という語を横線で消し、これをいったんは「使者」(messenger) で置き換えている。しかし、その「使者」という単語にも横線を引いて、今度は「伝令係」(courrier) というまた別の語に差し替えていることが、草稿にははっきりと記されているのである。つまり、執筆の最初の段階ではクラフト男爵の言葉をそのまま引き写し、それを後から消そうとしたことが、草稿を見れば一目瞭然であるわけだ。さらに、草稿 (VM) と十八折判 (VH) とを比べてみると、十八折判では、「トリポリタニア散策」にも草稿にもない「アフリカの空の高みに」(dans les hautes zones du ciel africain) という言葉が加筆されていたり、「トリポリタニア散策」でも草稿でも用いられていた「召集する」(convoquer) という動詞が「連れてくる」(amener) とい

---

21) 原文：«Le prophète écouta ce récit avec indignation, appela la huppe, son oiseau favori, et lui ordonna de convoquer toutes les grues qui se trouvaient sur la face de la terre.» (KR, p. 78.)

22) 原文：«Aussitôt le prophète d'appeler sa huppe, qui est son ~~oiseau~~ messenger courrier favori, et de lui donner ordre de convoquer toutes les cigognes de la terre.» (VM, t. 3, p. 92.) 取り消し線による文字の抹消はヴェルヌ。

23) 原文：«Aussitôt le prophète d'appeler sa huppe, qui est son courrier favori, et de lui donner ordre d'amener dans les hautes zones du ciel africain toutes les cigognes de la terre.» (VH, p. 195.)

う別の動詞に変更されていたりするが、これらもまたクラフト男爵の文章からできるだけ遠ざかろうとした改変作業の結果だと考えることができよう。なお、同工異曲となるので類例を網羅的に取り上げて分析することは控えるが、こうした傾向は決してこの箇所だけではなく、『シャーンドル』第5部第2章のそこここに観察されるものであることを付言しておく。

#### 4. 言述の圧縮

ところで、ヴェルヌのエクリチュールに顕著に見られるもう一つの特徴は、「トリポリタニア散策」から『シャーンドル』の草稿へ、『シャーンドル』の草稿から活字版へと、ほぼつねに言葉を削り、情報を圧縮する方向で書き換えが行われているということである<sup>24)</sup>。

例えば、トリポリタニアの人口や兵力に関する記述。クラフト男爵の紀行文では三つの異なるページに分散していたものを、ヴェルヌは以下のように一文にまとめて提示している。

KR：その〔＝トリポリタニア全体の〕人口は150万人を超えると考えられている<sup>25)</sup>。

+

KR：〔トリポリの<sup>イントラ・ムロス</sup>城壁内の人口は2万人にのぼる可能性もある<sup>26)</sup>〕。

+

KR：トリポリタニア人の群れの羊飼いたるオスマン帝国の兵力は、この地方全体で約6,000人。その内の1,000人ほどが山地を、500人ほどがキレナイカを守っている<sup>27)</sup>。

---

24) この点については、ドイツの研究者フォルカー・デース (Volker Dehs) 氏から有益な示唆をいただいた。記して感謝申し上げます。

25) 原文：«On suppose que sa population est de plus d'un million et demi» (KR, p. 66.)

26) 原文：«La population *intra muros* peut s'élever à vingt mille habitants.» (KR, p. 69.)



VH：トリポリタニアの人口は150万人以上、兵士の数も6,000人——山地に約1,000人、キレナイカに500人——にのぼるが、トリポリの街に限っていえば、住民の数はせいぜい2万から2万5,000人である<sup>28)</sup>。

だが、クラフト男爵の文章とヴェルヌの文章とを突き合わせてみたときにいささか奇妙に思われるのは、こういった情報の圧縮がつねにポジティブな効果をあげているようには見えないことだ。ナツメヤシの多彩な用途について書かれた『シャーンドル』第5部第2章の以下の一節を読んでみよう。

VH：シドラ湾の海岸地帯から来たベン＝ウリード族やアワーキル族。彼らの国のナツメヤシの木は、酒も、果物も、パンも、ジャムも与えてくれる<sup>29)</sup>。

たしかにコンパクトにまとめられてはいるが、実際のところ、ヴェルヌのこの記述は簡潔すぎて、どうすればナツメヤシの木から「酒も、果物も、パンも、ジャムも」得られるのかがいまひとつイメージしづらい（ナツメヤシの木が「パン」まで与えてくれる、というのは特にわかりにくい）。

---

27) 原文：«La force armée dont dispose le berger ottoman du troupeau tripolitain est environ de six mille hommes pour toute la province, dont un millier tient le Djébel, et cinq cents autres environ la Cyrénaïque.» (KR, p. 70.)

28) 原文：«Si l'on compte plus de quinze cent mille habitants dans la Tripolitaine, avec six mille hommes de troupe, – un millier pour le Djébel et cinq cents pour la Cyrénaïque, – la ville de Tripoli, prise à part, n'a pas plus de vingt à vingt-cinq mille âmes.» (VH, p. 182.)

29) 原文：«des Benouliès, des Awâguirs, originaires des rivages de la grande Syrte, auxquels le dattier de leur pays fournit le vin, les fruits, le pain et les confitures.» (VH, p. 181.)

では、さかのぼってクラフト男爵の文章を読んでみるとどうか。

KR：春、雌花を受粉させてやることのほかには何の手入れも世話も  
いらぬナツメヤシの木から、彼らは勞せずして収獲物を得て  
いる。ナツメヤシの木からは酒も作れるし、夏のあいだは新鮮  
な果物を手に入れることもできるし、陽に当てて実を過熟させ  
れば本物のジャムもできるし、さらに種を取り除き、熟れてほ  
とんど乾ききった実をこねればパンも作れるからだ<sup>30)</sup>。

ヴェルヌの記述の元となったこの文章を読めば、ナツメヤシの木から  
「酒」も「果物」も「パン」も「ジャム」も手に入る、ということによ  
やく得心がいく。ナツメヤシの実をどのように加工すればパンやジャムが  
できるかが、きちんと説明されているからである。だが、ヴェルヌはこ  
ういった加工の手順の詳細を省いてしまっているから、ナツメヤシの木の非  
凡な汎用性だけが際立ち、読者はまるでこの木に魔力でも備わっているか  
のような印象を受ける。このような簡略化の意図は判然としないが、必要  
充分な記述があってわかりやすいのはまちがいにクラフト男爵のテクス  
トの方であろう。

なお、この種のやや強引にも見える情報の圧縮は、ヴェルヌにおいては  
決して珍しくない。『シャーンドル』第5部第2章だけを見ても、言葉の  
削減がむしろヴェルヌのテキストの質の劣化をもたらしていると思しきケ  
ースは散見されるのである。

次に挙げる例は、チュニジアやリビアの民族衣装「フーリー」の描写な

---

30) 原文：«Le dattier, qui n'exige aucune culture, aucun soin, sinon la fécondation des fleurs femelles au printemps, leur donne des récoltes sans fatigue ; ils en tirent du vin, des fruits frais pendant l'été, de véritables confitures lorsqu'ils laissent la datte se cuire au soleil, enfin du pain qu'ils fabriquent en pétrissant le fruit mûr et presque sec, après en avoir retiré le noyau.» (KR, p. 77.)



のだが、ヴェルヌはクラフト男爵の文章をうまく咀嚼しきれぬまま、ぞんざいに自作の中に取りこんでいるように見える。やや長くなるが、両者を引用しておこう。

**KR**：フーリーを着用する人々は、男女とも、頭から爪先までこの大きな粗布に身を包み、ひだはすべて胸のところへもってきて、銅のピンで留める。女は、頭の上から垂れているこのシーツのような布の両側を顔の前で交差させ、左目の前に、小さな三角形の隙間だけを残しておく。一方、男の着方は少しちがう。顔を隠すのではなく、女が前でひだ状に寄せていた布を、肩の後ろに垂らすのである<sup>31)</sup>。



**VH**：現地の人々は、ほぼ全員がバルバリア地方の民族衣装「フーリー」を着ている。男なら、この覆い布のひだを銅のピンで胸のあたりに留め、女なら、左目しか見えないように布の上端部を顔に垂らす。この違いがなかったら、着ているのが男なのか女なのか見分けがつかないにちがいない<sup>32)</sup>。

---

31) 原文：«Les créatures humaines qui en [= du haouly] font usage, mâles ou femelles, s'enveloppent des pieds à la tête dans ce grand lambeau d'étoffe grossière, dont ils ramènent tous les plis sur la poitrine ; là un clou de cuivre les assujettit. Les femmes tiennent croisées devant leur figure les deux parties du linceul qui tombent du haut de la tête, et ne laissent qu'une petite ouverture triangulaire devant l'œil gauche ; les hommes se drapent un peu différemment : ils ne se couvrent pas le visage, et rejettent derrière l'épaule le pan que les femmes ont ramassé en plis devant elles.» (KR, p. 76.)

32) 原文：«des indigènes, presque uniformément vêtus du «haouly» barbaresque, sous lequel on ne saurait distinguer une femme d'un homme, si les hommes ne rattachaient pas les plis de cette couverture à leur poitrine au moyen d'un clou de cuivre, tandis que les femmes en font retomber le pan supérieur sur leur figure, de façon à n'y voir que de l'œil gauche» (VH, p. 180.)

ヴェルヌは、ここでは明らかにクラフト男爵の記述を歪めてしまっている。元の文章では、男女ともフーリーのひだを銅のピンで胸のあたりに留めており、この点について性差があるとは書かれていない。性別によって異なるのは、布の端の部分の使い方だけなのである（男はそれを肩の後ろに垂らし、女は顔を覆うのに使う）。ところが、ヴェルヌの記述によれば、フーリーのひだを胸にピンで留めるのは男だけだということになり、女はどうやってこの布を身にまとうのが判然としない。それどころか、そもそも情報量が少なすぎて、この民族衣装がどれほどの大きさもち、どのような形状をしているのかさえ、読者にはほとんどイメージすることができないのである。情報が整然と並び、フーリーを着た男女の姿が想像しやすいのはまちがいにクラフト男爵の記述の方だ。ということは、ヴェルヌはこの明晰だったはずの元の文を無理に圧縮することで、その劣悪なコピーを作ってしまったのである。だが、それはいったいなぜなのか。

小説家の意図をしかと捉えるのは難しいが、おそらくは前章で見た類義語・類義表現による書き換えと同じく、これもまたクラフト男爵の文章とのあからさまな共通点を減らし、そこから距離をとるための措置だったのではないだろうか。ヴェルヌ自身はトリポリタニアを訪れたことがあるわけではなく、現地の情報を独自に追加することはできなかった。したがって、「トリポリタニア散策」の文章を書き換えるにしても、加筆することはそもそも不可能だったわけだ。ならば、ヴェルヌがクラフト男爵の紀行文との差異化を図るとしたら——類義語・類義表現による書き換えのほかには——言葉を部分的にでも減らすこと、すなわち、元の文章を縮約することこそが最も手っ取り早い方法であったことは明らかだろう。おそらくはそれゆえにこそ、ヴェルヌは書き換え後の文章が多少不自然になることには目をつむり、『シャンドル』がクラフト男爵のテキストとは明確に異なる外観をまとうことを優先させて、「トリポリタニア散策」の記述の圧縮を試みたのである。

## 5. 結論

本稿では、『シャンドル』第5部第2章を書くヴェルヌが、クラフト男爵の紀行文「トリポリタニア散策」から単語のレベルでも言述のレベルでも多くの地誌学的情報を借りていることを示し、その——テキスト間における——移植の仕方について分析を行った。

まず、単語については、本稿の第二章で見たように、ヴェルヌ自身はクラフト男爵の用いた綴りをほぼ精確に書き写しているものの、それが活字化される際に、おそらくは植字工の不手際で、スペリングミスが多くなっているということが明らかにされた。だとすれば、『シャンドル』に限らず、ヴェルヌの作品に出てくる外国語の綴りに少しでも不審な点が見受けられる場合には、活字版だけではなく、自筆原稿を、さらにはヴェルヌが執筆時に参考にしたと思われる文献を突きとめて、そちらを確認する必要があるだろう。《驚異の旅》を研究、ないしは翻訳する場合には、外国語のアルファベット表記がひよっとすると植字工の手を経て歪められているかもしれない、という可能性をつねに頭に入れておく必要があるのである。

一方、本稿の第三章と第四章では、ヴェルヌがクラフト男爵の紀行文からしばしば言述のレベルでも情報を取りこんでいること——とはいえ、元のテキストを丸写しにするのではなく、その一部を類似の表現で置き換えたり、下敷きにした文章を圧縮したりしていること——を示した。「トリポリタニア散策」との文言の完全な一致によって「剽窃」ないしは「盗用」と見なされることを防ぐための措置だと推測されるが、その結果、ヴェルヌが書き換えたテキストには、情報量の不足や記述内容の不整合といった文章の質の低下が起こっているケースも散見された。

地理学者や冒険家の手になる地誌学的文献からの情報の借用は、自分では足を踏み入れたことのない異国の土地を描くことの多いこの小説家にと

っては必要不可欠だったわけだが、それにしても、このアレンジメントの粗雑さはなんとも不可解である（例えば、クラフト男爵の文章をさらに徹底的に改変し、引き写しの痕跡を完全に消し去ることも、時間さえかければそう難しくはなかったはずなのだが……）。この点については、今後、『シャーンドル』以外の作品を分析対象として同様の検証作業を行うなど、さらに多くの事例を検討することで答えを出していきたい。

[付記] 本研究は、JSPS 科研費 15H03200 の助成を受けたものです。